チャペルアワー「人間を考える」　2019 年 11 月 28 日

「縁を大切に」

梶井厚志

人生には様々な縁が複雑に絡み合っていて、それらが人格をつくりあげるようだ。自分はキリスト教信者ではなく、キリスト教と関係が深いとは感じていなかった。ところがよく思い起こすと、私の人生の重要な場面で不思議な縁があったと思い当たるのである。

まず通った幼稚園がクリスチャンだった。もっとも当時私は北海道の田舎町に住んでいて、両親ともに車の運転をしなかったから、小さなバスで送迎してくれるその幼稚園以外に選択肢はなかった。仏教だろうが神道だろうが、子供が団体生活を学べればどこでもよかったのである。その幼稚園の記憶は全くないが、キリスト教の礼拝を初めて経験したのは、このような縁からである。

次は高校時代だ。東京のとある小さな教会で、毎週日曜日午後に催された英会話教室に、私は通ったのである。高校一年生の時の校内学力テストで、自分に全く英語力がないことを発見し、すがれるものには何でもすがろうと悟りを開いていた時期だった。母の知り合いの知り合いくらいに教会関係者がいて、この教室の存在を知ったという縁だったと思う。教室では、教会の礼拝にくる日本語のほとんどわからないアメリカ人が教師になって、日常会話の練習をした。

この英会話教室通いは長続きし、高校卒業後大学２年目くらいまで通った。長続きしたのは、無料の教室を運営してくれる教会関係者の熱意のたまものではなく、中高と男子校に通った私にとって、この英会話教室は女子と語れる貴重な機会だったからだ。英語の会話練習をするよりは、同世代の女子と日本語で話すのが私の本当の目的であり、英語教室で費やす時間は、教室後の話題作りに必要な投資に他ならない。それゆえ、明らかに投資効率の悪い午前の礼拝には一度たりとも行かなかった。動機に問題ありとはいえ、毎週ネイティブのアメリカ人と会話を積み重ねた効果は絶大であった。のちにアメリカへ留学したときに、この４年ほどの会話体験は貴重な縁だったと実感したものである。

さて、英会話教室から足が遠のいてしばらくしてからのこと、教会にやってくるアメリカ人信者が、普通の家庭にホームステイをしたいのだが、引き受けてくれまいかと頼まれた。私の父母は英語をほとんど解さないので躊躇したが、教室で世話になってきたのを恩義に感じていたので、これも何かの縁だろうと考えて、結局引き受けることにした。２年ほどの間に、全部で３名ホームステイを引き受けた。

そしてこの縁はさらに展開する。大学院留学が決まったものの語学研修の学校に行く金がなかった私は、この時ホームステイした人に紹介されたメリーランド州在住の牧師家族のところに転がり込み、一週間以上居候して大学院への入学に備えたのだった。突然やってきたどこの馬の骨とも知れない異教徒を、暖かく受け入れてくれたこの家族の度量には、本当に感心する。

そして今年関学に転籍して、チャペルアワーでこのような話をしている。これも何か大切な縁のはずである。